参考文献・引用文献の書き方・引用の仕方

2019 年 9 月 20 日

東京女子大学　松尾　慎

１．　文献の引用の仕方

引用というのは、論文や新聞記事の全文、一段落、一文、一文の中の語句を<u>そのまま</u>抜き出すことです。ですから、どこからどこまで抜き出しているか明確に示す必要があります。それはその論文や記事の筆者の考えと皆さんの考えをはっきり区別する必要があるからです。どうして区別する必要があるのでしょうか。それは皆さんの考えや考察に関しては皆さん自身が責任をもつ必要がありますし、他者の考えや考察をあたかも皆さんのオリジナルのように論文やレポートに載せることは著作権やオリジナリティの侵害となります。もっと強い言葉で言えば、犯罪行為になります。

著作権が発生しているもの（書籍、論文、ホームページ、ブログ等）を無断でそのまま引用したり、多少手を入れたとしても無断引用と認められる行為をした場合、著作権の侵害になりますし、**<u>剽窃行為</u>**とみなされます。「うっかり引用し忘れました」では通りません。本学規定では、当該科目は、当然、不合格になりますし、懲戒の対象となります。卒業論文の場合、就職が決まっているかどうかは、まったく考慮されませんので、この点、絶対に忘れないで下さい。これまで書いたレポートで大丈夫だったからこれからも大丈夫ということはありません。

● **<u>引用の方法</u>**

大前提！：<u>引用する場合は、ページを書く必要がある</u>

（例 1）文の中で引用をする場合

本論文では、日本統治時代に日本語教育を受けた世代の日本観を明らかにしていく。まずは台湾に関し概観する。台湾は、2005 年 11 月現在、人口が約 2276 万人である。丸山（2000）によれば台湾では「1990 年代以降、『四大族群』というカテゴリーが、徐々に一般的なコンセンサスを得、現在のエスニック的なカテゴリーを示す用語として定着してきた」（丸川 2000:25 - 26）。実際には、四大族群以外にも外国籍配偶者が激増しているのが現在の台湾の姿である。

※　引用部分が「　　」で示されている。

※　筆者の名前は通常、苗字（ラストネーム）だけでいい。ただし、論文やレポートの最後に載せる「参考文献・引用文献」ではファーストネームも載せる。筆者が台湾人である場合は、陳さんや林さんが多いため、名前をすべて書くことが多い

例．丸川哲史(2000).『台湾、ポストコロニアルの身体』、青土社.

注意！　（違いが分かりますか？）

（悪い例　⇒　）「・・・・用語として定着してきた。」（丸川 2000:25 - 26）
（良い例　⇒）　「・・・・用語として定着してきた」（丸川 2000:25 - 26）。

（例 2）引用を独立させた書き方の例

1895 年に清朝が日清戦争に敗れ、下関条約によって台湾は日本に割譲された。当時の台湾における言語状況を權藤(1896)は以下のように述べている。

「蕃語を除くの外台湾人民間に通用する言語は台湾語とも稱すべき混成土語の外、厦門語、福州語、広東語にして極て少数者の間には官話の通用するあり」（權藤 1896:66)。

官話とはいわゆる北京語を指している。つまり、この時代の台湾人の多くは現在の国語である北京語を話す者はほとんどいなかったことが分かる。

●　引用していない場合（間接引用の場合）は、ページ数を書く必要はない

（原文）（外国籍住民が）「日本人とまったく同様に保険診療が受けられ、市長選で一票を投じられるという平等と、彼らが市民生活に困難なく参加できるようコスト・人的資源を投入しても母語教育や医療通訳制度を整備することとは施策が違うのだが、後者のような対応が軽視されてはならない」（宮島 2003:15）。

⇒　この中から内容をまとめて利用する

宮島（2003）は、外国籍住民が市民生活に困難なく参加できるよう母語教育や医療通訳制度などが軽視されてはならないことを指摘している。

でいいです。ページをしっかり示しておきたいなら、

宮島（2003:15）は、外国籍住民が市民生活に困難なく参加できるよう母語教育や医療通訳制度などが軽視されてはならないことを指摘している。

でもいいでしょう。

もちろん、
宮島（2003）は、外国籍住民が「市民生活に困難なく参加できるよう」（宮島 2003:15）「母語教育や医療通訳制度」（宮島 2003:15）などが「軽視されてはならない」（宮島 2003:15）ことを指摘している。

と書いてもいいですが、あまりにも読みにくいですね。

いずれにしても、宮島（2003）のオリジナルのアイデアですから、自分で考えたふりをして宮島（2003）に言及しないのはルール違反です。

● **Web からの引用**

（例）難民支援協会の HP から引用する

難民支援協会のホームページによると、難民支援協会は「日本にいる難民から、年間年間 2,400 件以上（来訪 580 人）の相談が寄せられ、専門的なスタッフが一人ひとりへ支援を行って」[1]いる。

← 脚注に記載するとともに、論文末にも参考にしたホームページとして載せること。

● **孫引き**はしてはいけない

（例）松尾(2006)によると、Ferguson(1959)において、Ferguson は、ダイグロシアを「比較的安定している言語状況で、そこには主要な言語変種(標準語であったり、地域的標準変種であったりする)に加えて、非常に異なる上層的言語変種が存在する状態をいう」と定義している。

← これは絶対にダメ。必ず Ferguson(1959)を入手して、読んでチェックしてから書くこと！入手できなければ引用を断念するのが原則である。

● **Wikipedia などは引用しないこと！**

⇒ 誰が書いたか分からないし、信頼性に書けるから。

２． 論文やレポートの最後に載せる「参考文献（引用文献）」の書き方

引用文献＝論文に引用した文献

参考文献＝引用はしていないが、論文を書く上で（研究をする上で）参考にした文献

● 書籍（単行本）の場合 （書籍名は二重括弧 『』）

東 照二(1997).『社会言語学入門』、研究社出版.

Holmes,J.(1992). *An Introduction to Sociolinguistics.* New York:Longman. ←Janet Holmes さん

● 書籍に収められている論文の場合（共著） 編著者の名前が書かれていることに注意！

小野原信善(2004).「アイデンティティ試論 フィリピンの言語意識調査から」、小野原信善・大原始子編、『ことばとアイデンティティ』、三元社、pp.15-51. **ページを書くこと！（読者にとって親切な情報）**

Giles,H; Bourhis,R.Y; and Taylor,D,M.(1977). “Towards a Theory of Language in Ethnic Group Relations” In Giles, H.(ed*). Language, Ethnicity and Intergroup Relations,* Academic Press, pp.307-348.

[1] 難民支援協会ホームページ。
https://www.refugee.or.jp/jar/?gclid=CjwKEAiAtefDBRDTnbDnvM735xISJABlvGOvwtPbNjkYw1uybsfPPJ_6Md0P7E5HaaqNrd1giLLt3RoCmEHw_wcB 2017 年 1 月 14 日検索。

● 学術誌の中に収められている論文の場合（論文名は一重括弧、雑誌名は二重括弧）

宇佐美まゆみ(1999).「談話の定量的分析－言語社会心理学的アプローチ」、『日本語学』、Vol.18, No.10, 1999、明治書院、pp.40-56.

Anisfeld,E and Lambert,W.E.(1964). “Evaluational Reactions of Bilingual and Monolingual Children to Spoken Languages”*Journal of Abnormal and Social Psychology Vol.69, No.1.* pp.89-97.

● 翻訳本の場合

トラッドギル,P、土田滋訳(1975). 『言語と社会』、岩波新書.

（Trudgill,P(1974). *Sociolinguistics: An Introduction.* Penguin Books Ltd.）.

● インターネットの情報（検索した日を書いたほうがよい）

認定 NPO 法人　難民支援協会（2019 年 5 月 1 日）

https://www.refugee.or.jp/refugee/

法務省入国管理局（2019 年 5 月 1 日検索）

http://www.immi-moj.go.jp/index2.html

● 参考文献の並べ方

1）日本語・英語・中国語別に並べる（日本語を最初にする必要はない）

日本語・・・あいうえお順　or　アルファベット順

英語・・・アルファベット順（Family name が基準となる）

中国語・・・画数・その他

2）言語が異なっても一緒に並べる

普通は、アルファベット順になる。例. 陳＝CHEN、古川＝FURUKAWA

● 引用はどれぐらいの分量まで許されるのか

卒論のテーマとして、「沖縄における国語教育とアイデンティティ」を設定した。論文の中で、「沖縄における国語教育の歴史」を取り上げる章がある。しかし、もちろん、そのテーマに関して、自分自身の知識はないので、書籍や論文を参考にせざるを得ない。

→　では、どの程度、引用しても許されるのか？

本章では、沖縄における国語教育の歴史を概観したい。外間（1971）は沖縄における共通語教育に関し、以下の通り述べている。以下、引用する。 中央では、明治 4 年、廃藩置県が断行され、中央集権的な統一体制ができ上がっていますが、社会事情の複雑な沖縄では、それから遅れること 8 年、明治 12 年に置県制度が布かれました。置県制度が布かれた沖縄で・・・・・（中略）・・・・・昭和 20 年の終戦以後は、日本本土でも、社会的低迷、思想的沈

滞が長く、教育どころか、国家の方向づけにすら・・・(外間 1971：68－99)。←30 ページ以上引用！

以上、外間が述べているような教育が歴史的に行われてきたのである。こうした歴史を踏まえて、次章では本論文の調査の概要を述べたいと思う。

引用部分はあくまでも「従」でなければ、ならない。自分自身の論文、レポートが「主」でなければならない。確かに、知識のない部分では、引用したり、参考にする分量が多くなるのは理解できる。しかし、自分自身の論文やレポートで明らかにしたいことがはっきりしていれば、そのまま丸写しにはならないはずである。なぜなら、何に焦点を当てるかによって、例えば、歴史のどの部分を記しておく必要があるかは異なってくるはずだからである。

上の例は、引用の仕方自体は、正しいが、「従」と「主」の観点から言えば、30 ページ以上をそのまま引用しているので著作権の侵害行為といえる。

●論文末の参考文献の挙げ方の例

参考文献

（日本語文献）←あいうえお順に並べる

東　照二(1997).『社会言語学入門』、研究社出版.

伊藤　潔(1993).『台湾　－400年の歴史と展望』、中公新書、中央公論社.

宇佐美まゆみ(1999).「談話の定量的分析－言語社会心理学的アプローチ」、『日本語学』、Vol.18, No.10, 1999. 明治書院、pp.40-56.

大原始子(1997).『シンガポールの言葉と社会－多言語社会における言語政策－』、三元社.

岡田　充(2003).『中国と台湾－対立と共存の両岸関係』、講談社現代新書.

小倉虫太郎(2000).「台湾の言語・文化状況をめぐって－ポストコロニアル的条件と漢字の表意性」、『言語』2000 年 3 月号、pp.52-57.

小野原信善(2004).「アイデンティティ試論　フィリピンの言語意識調査から」、小野原・大原編、『ことばとアイデンティティ』、三元社、pp.15-51.

カルヴェ,ルイ=ジャン、萩尾　生訳(2001).『社会言語学』、白水社、(Calvet,Louis-Jean.(1993). *La sociolinguistique.* Paris: Presses Universitaires de France.).

權藤震二(1896).『臺灣實況』、東京法學社、(1985年復刻版、成文出版社、台北）.

真田真治(2005).「言語意識」、真田真治・庄司博史編、『事典　日本の多言語社会』、岩波書店、pp.348-349.

シュリーベン＝ランゲ,B、原・粕谷・李訳(1996).『社会言語学の方法』、三元社.
(Schlieben-Lange,B.(1973). *Soziolinguistik-Eine Einführung*. Verlag W. Kohlhammer GmbH.).

田中克彦(1981).『ことばと国家』、岩波新書、岩波書店.

陳培豊(2001).『「同化」の同床異夢　－日本統治下台湾の国語教育史再考』、三元社.

トラッドギル,P、土田滋訳(1975). 『言語と社会』、岩波新書.
（Trudgill,P(1974). *Sociolinguistics: An Introduction.* Penguin Books Ltd.）.
(Fishman,J.A.(1972).*The Sociology of Language*. Newbury House Publishers.).

藤井（宮西）久美子(2003).『近現代中国における言語政策』、三元社.

ベーカー,コリン、岡秀夫訳・編(1996)『バイリンガル教育と第二言語習得』、大修館書店.

(Baker,C(1993). *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon: Multilingual Matters.).

松尾　慎(2001). 「ブラジル日系人の言語使用」、野呂香代子・山下仁（編）、『「正しさ」への問い』、三元社 pp.149-182.

松尾　慎(2003). 『インドネシア華人社会における言語シフトと言語選択』、大阪大学大学院言語文化研究科提出博士学位論文.

（英語文献）　著者名（ファミリーネームのabc順に載せること）

Anisfeld,E and Lambert,W.E.(1964). "Evaluational Reactions of Bilingual and Monolingual Children to Spoken Languages"*Journal of Abnormal and Social Psychology Vol.69, No.1.* pp.89-97.

Clyne,M.(2003). *Dynamics of Language Contact*. Cambridge Univ Press.

Edwards,J.(1992). "Sociopolitical Aspects of Language Maintenance and Loss: Towards a Typology of Minority Language Situations". In Fase,W, Jaspaert,K and Kroon,S.(eds). *Maintenance and Loss of Minority Languages*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. pp.37-54.

Edwads,J.(1995). *Multilingualism*, London: Penguin Books. (First published by Routledge 1994).

Fasold,R.(1984). *The Sociolinguistics of Society*. Oxford: Blackwell.

Feifel,Karl-Eugen.(1994). *Language Attitudes in Taiwan –A Social Evaluation of Language in Social Change-*. 文鶴出版.

Fishman,J.A.(1991). *Reversing Language Shift*. Clevedon:Multilingual Matters.

Gal,S.(1979). *Language Shift.* New York: Academic Press.

Holmes,J.(1992). *An Introduction to Sociolinguistics.* New York:Longman.